

李華の復古論

——盛唐人の文學改革——

加藤 國 安

はじめに

李華（七一七～七七四）というと、文學の面では唐代古文運動の先驅者（初唐の陳子昂との説もあるが、仲間の贊同や門弟による繼承がなく單獨行動なので、別に扱う）とされ、また宗教の面では天台宗の支援者として知られる。文學史上、李華の果たした役割については、弟子の獨孤及に、「天寶中、公（李華のこと）は蘭陵蕭茂挺（蕭穎士のこと）・長樂賈幼幾（賈至のこと）と與に勃として復た起き、中古の風を振ひ以て文徳を宏む。公の作は王道に本づき、大抵、五經を以て泉源と爲し、情性を抒ぶるに諷を託す。……識者、之を文章の中興と謂ふ。公、寔に之を啓く」（「檢校尚書吏部員外郎趙郡李公中集序」とあり、また獨孤及の門弟たる梁肅にも、「（唐の）文章は三たび變ず。初めは則ち廣漢の陳子昂……、次いで燕國の張公説……、天寶已還は則ち李員外（李華）、蕭功曹（蕭穎士）、賈常侍（賈至）、獨孤常州（獨孤及）、肩を並べて出づ。故に其の道益ます熾なり」（「補闕李君前集序」とある。當初は弟子たちの間でこうした認識があったものの、しかしやがて古文の中興者李華の名は忘却されていった。のちに明の胡應麟（『少室山房筆叢』「九流諸論卷中」）、楊慎（「丹鉛雜錄」）、清の趙翼（『二十二史劄記』卷二十「唐古文不始韓柳」の條）などがこの點に言及するが、これが文學史上明確に位置づけられたのは現代になってのことである。たとえば林田愼之助「唐代古文運動の形成過程」（『中國中世文

學評論史』一九七九 創文社）や、屈光「盛唐李肅（李華と蕭穎士—加藤補）古文集團及其與中唐韓愈集團的關係」（『文學遺產』一九八七・第四期）が重要だが、ここではより近年の成果、河内昭圓「李華年譜稿」（『眞宗總合研究所紀要（大谷大學）』14 一九九六）から紹介する。

文體でいうところの古文は、唐の中葉に李華とその盟友蕭穎士ら先河として興り、獨孤及・梁肅・權德輿・呂溫らを経て韓愈・柳宗元の能文家を生み、ここに至って一つの到達點を見た。これら所謂唐代古文家は一時に集團的に輩出したもので、それぞれ師弟あるいは朋友といった強い人間關係を保ちながら、次第にその理論と實踐を發展高揚させ、ついに美辭麗句の駢文を排し、達意載道の古文を提唱するに至つたのである。

李華は、時代的には杜甫（七一二～七七〇）と同時期の人物だが、科擧落第が續いた杜甫に比し、十九歳で進士合格を果たし、以後、祕書省校書郎・伊闕尉などを經て、天寶十一載（七五二）には監察御史に擧げられている。したがって杜甫よりずっと政治の現場で、自己の理念を實踐できる立場にあった。また當然それ故の苦闘も深刻なものがあつた。ただ彼についての研究は、古文家としての師弟關係を中心にして、復古運動がどう展開したかを論ずるのがほとんどで、その他としてはようやく年

譜が作成されつつある段階である。ことに河内氏の「年譜稿」は、かなり詳細なものである。

では、李華がどんな作品を書き、またどんな具體的内容を述べ、そしてどんな特色があるのかという、作品に即しての具體的分析となると、今日に至るまでほとんどない。小論は、この點の理解を前進させることを目的とする。

一 寓話による政治告發

李華(字は遐叔)の著作は『李遐叔文集』といい、『四庫全書』別集に收められている。これは『文苑英華』『唐文粹』に収録された作品を編集したもの。さらに『全唐文』に收められ、その後、『全唐文新編』(吉林文史出版社 二〇〇〇)が刊行、『全唐文補編』『唐代墓誌彙編』で遺漏分が追加されている。李華の文集は計八十餘編あり、大半が墓誌や碑銘である。その中には佛教關係の碑も十二編ある(『補編』はなし、『唐代墓誌彙編』は一編)。これらの佛教碑は宗教史上重要な李華のもう一つの事跡なのだが、小論ではこれには觸れない。唐代古文集團の首魁としての李華に限定して、彼の作品を取り上げることとする。

その際、論者の間で扱われる主な資料は、李華が高く評價した三人の仲間—元德秀・劉迅(劉知幾の第五子)・蕭穎士—について記した「三賢論」、また元德秀のための「元魯山墓碣銘」、蕭穎士の文學史觀を述べた「揚州功曹蕭穎士文集序」、知人の文學活動を稱えた「楊騎曹集序」「贈禮部清河孝公崔沔集序」、及び李華の載道主義が自身の左遷により深化する様子の分かる「臥疾舟中相里范二侍御先行贈別序」などである。これらは唐代復古の系譜を理解する上での重要文獻だが、しかし李華はこの他にも古文の作品を多くはないけれども残している。ただ從來全くとい

つてよいほど取り上げられることはなかった。熟讀するに古文家の首魁らしい内容であり、小論ではこれらの作品を中心に見ていく。原文は略し、書き下し文のみ掲ぐ。注記した一編を除いては、すべて全文を掲載する。

「鶚の狐を執ふる記」(『全唐文新編』卷三百十六)

某、嘗て異鳥の豐狐を中野に撃つを目にす。雙睛は燿宿し、六翮は雲に垂れ、迅きこと猶ほ電の馳せるがごとく、厲しきこと霜の殺すが若し。吻は肝腦を決し、爪は腎腸を剝く。昂藏し自ら雄として、條歟として逝く。名を耕す者に問へば、對へて曰はく、「此れ黄金の鶚(クマタカ)なり。何ぞ其れ快なるかな」と。

因りて之に讓(拜禮)して曰はく、「仁人の心を乗するや、哀矜して暇あらず。何の樂しきか之れ有らん」と。曰はく「是れ狐なり。患を爲すこと大なり。我が姻族を震驚し、我が閭里を撓亂す。善く徐子の盧を逃げ、申孫の矢を畏れず。皇祇、或いは其の惡を以て貫盈すれば、鶚を以て之を誅たしむ」と。

予は斯の禽の快なければ、誰か爲さん。悲しいかな。高位憤は憤れること疾く、厚味は毒腊しけり。道に遵いて盛を致すも、或いは諸殃に罹る。況んや威を假りて撃を爲すは、能く禍を速からざらんや。位に在る者は當に其の心を洒濯し、凶意を祓除すべし。惡は是れ務めて去り、福は其れ大いに來たらしめん。

然らずんば、則ち狐の人を害するよりも甚しき有らん。庸ぞ鶚の能く爾するより忸ずかしき。

「某、かつて變わつた鳥が太つた狐を、野原で狩りしているのを目にしたことがある」と始まるこの寓話。いかにも復古調の趣である。「そ

の速きはあたかも稻妻のごとく、またその激しさは霜が草木を枯らすのごとし」というから凄まじい。またその嘴は肝臓や脳をえぐり、爪は腎臓や腸を引き裂き、意氣軒昂として雄々しく、そしてあつという間に去っていく。一瞬の出来事に呆然として、私が「何という鳥か」と、耕していた者に尋ねてみると、「黄金のクマタカじゃ。すごい速さじゃろう」とのこと。そこで拜禮して、これはいつたい何事かと問う。農夫いわく「キツネなんぞでございますよ。ひどい悪さをしましてな。わが親類をおのき驚かせたり、わが村を騒がせたりしております。あやつめ、弓も矢もたくみに逃げ恐れませぬ。そこで天地の神々が、そのあまりの悪事をこらしめるべく、あの黄金のクマタカを使わして誅してやったというわけなんです」と。

この話を聞いて、私は深く感心した。「余にはそんな高度の狩獵術はないから、何もできぬわ」と。村の家畜を襲つたりする天敵キツネを狩る空の猛禽、黄金のクマタカは神に遣わされた正義の使者だ。ひるがえつて人間社會の場合どうか。悪事をこらしめる政府の高官は正義の權力を行使できるのか。否である。彼はとかく地位を追われやすい。また正義の公權力たらんとしても、思いがけぬ災難がある。ここの箇所は古典の教養をベースに、「高位は憤れること疾く、厚味は毒腊し」（「國語」周語による）と述べられる。「悲しいかな、高い地位にいる者は倒れやすく、また旨い物には強い毒がある（高祿をはむ者は災いを受けやすい）。道に従つて（懸命に努力し）よい社會に致そうとしても、様々な災いにかかつてしまう。」この「道に遵ひて盛を致すも、或いは諸殃に罹る」は、李華が政治改革に立ち向かつたものの、挫折に終わつたことをあわせ考えるに、彼の率直な心情をうかがわせる。「まして權力の威光を借りて悪事をなせば、自ら禍を招く。」これは腐敗した勢力への訓戒である。最後に、私はいう——「高官たる者、いつも清廉にして災難に巻き込まれないよ

うに注意をはらわなければならない。かつ民の幸福の實現に努力しなければならぬ。そうでなければ、かの黄金のクマタカに及ばないことになるぞ」と。寓話を用いることで、論旨の説得力を増さんとしている點が注目される。

そして結論。——もし眞劍に政治に取り組まなければ、キツネが人を害するどころの騒ぎではない。黄金のクマタカに比べて、何と恥ずかしいことではないか。今の人間社會が、つまり唐王朝の能力が問われているのだと。

まさに、「五經を以て泉源と爲し、情性を抒ふるに諷を託し」（獨孤及）た文章である。文體的に見ても、駢儷文ではなく論旨の平明さを重んじた古文で書かれている。當時としては「中古の風、復た今に形」（同）る、というほどの斬新な文章である。ただ韓愈の寓話と比べると、楊慎が「華の論文は簡にして盡くす。韓退之の人に與へし論文諸書も遠く及ばざるなり」（「丹鉛雜錄」）と述べたように、「簡潔にして意を盡くす」文體が、いささか飛躍的な文脈になつてしまつた感がある。分かりやすかつ道理の眞髓をつかむ文章を書くというのは、そう容易なものではない。四六駢儷文は、シンメトリカルな美や音楽的美といった格調により、自ずからある一定程度の名作を約束してくれる。また駢儷文は、當時の支配層たる貴族の意識と根深く連結した文體であり、言語による支配體制という點で貴族政治そのものである。しかしこの從來の慣例を捨てて、あえて素朴な色合いの言語により、普遍性に富む達意の政治論の文章を書くというのは、まさに至難の業である。復古的な文體を用いること自體が困難な上に、李華がそこに盛ろうとしたのがきわめて進歩的な考え方だつたから、當然、きびしい苦闘を強いられることになる。

では、なぜ李華はこうした本質的な文學改革に挑戦することになつたのか。また「識者、之を文章の中興と謂ふ。公、寔に之を啓く」（獨孤及）

と、弟子を激賞させるほどの革新的中興を、どのような作品において結實させたのか、次章へと考察を進めてみよう。

二 貴族社會の矛盾への痛烈な諷刺

「材の小大」〔全唐文新編〕卷三百十八

巢を攀る雛、羽翼、將に成らんとす。飛ぶを習ひて其の母に従ふ。不幸にして烏鳶の震す所と爲り、塵轍に墮つ。閨闈の家に侈女有り。珮車繡茵にて中陌を過ぐ。遇たま之を憐み、藏するに玉筥を以てし、粒は紅稻を以てす。胡ぞ然り而うして然する。材小にして貴と爲る。養ひて之を翫べば、力を爲し易し。

軛を充てし牛は、望むこと山の行くが若し。其の生くるや、任重くして遠きを致し、以て天下を利す。其の死するや、筋角・皮骨、皆、器用と爲る。水旱・寒暑の時ならざるに、艱難、乏れたるを驅せ、重岡を登り降り、塗潦を踏れ起く。蹄は離れ節は坼け、力氣、皆頓れて病む。目は猶ほ人を睨むがごときも、盜鳥、其の背に爪し、其の肉に喙するも、猶ほ喙の之を噉ふこと未だ逞にせざるを恨み、鷓鴣として相呼ぶがごとし。群犬、其の腹胃を引き、狼狽として之を争ふ。車馬の傍らを往復すること、千萬を以て計ゆるも顧みざるなり。胡ぞ然り而うして然する。材大にして累を爲す。扶けて之を救はんとするも、功を爲し難し。

向若、斯須の勞を彈くさずとも之を存せば、其の利は固より厚し。悲しいかな。材の大なるや累を爲し、材の小なるや貴を爲す。理に戻り道に悖ること、甚しきは莫し。天下に君たる者よ、辯じて之に返せば、則ち不世にして仁ならん。

「巢をよじ登るようになった雛は、まさに羽毛も完成しようとしています。そこで飛ぶ練習をしようとして母親の後に付き従うのですが、不幸にしてカラスやトビに脅されて、地面に落ちてしまうことがございます。」これまた寓話調で切り出される。この雛はまだ自力では生きていけぬひ弱な存在である。それをたくましい野生の鳥たちが威嚇する。思わず雛は縮み上がって巢から落ちてしまう。きびしい自然の掟だ。その後、いったい雛はどうなってしまうのか。冒頭のわずか数行のみで人を話の中に引き込んでしまう、この巧みな技。漠然と讀んでいると見逃してしまいが、ここにはもう李華のある決意が託されている。すなわち、これから私が申し述べますことに、どうか心をそらさずにご拜讀賜りたい。この懸命な思いが、冒頭部において早くも周到に構成された話柄を生んでいるのである。

「立派な家柄の金持ち女性がおられました。玉で飾った車に刺繍のしとねを敷いて、中くらいの街路を通りかかったときに、たまたま地面に落ちた雛を見て可哀想と思われ、(拾って)玉の箱に入れて飼い、エサは赤い米を差上げられました。どうしてこうなってしまうのか。もって生まれた才能は小さいのに身分は高貴となり、その家に養われ大事に愛玩されて能力も發揮しやすいとは。」この雛は才能も小さいのに、たまたま「閨闈の家」、すなわち貴族の目に止まっただけで出世していくのだ。——この毒氣と危険をはらんだ物言い。これが科擧の進士に及第し、政府の高官としての道を歩む人間の口から吐かれているとは驚きである。「道に違ひて盛を致すも、或いは諸殃に罹る」(「鷓鴣の狐を執ふる記」)を、自ら實踐するかのような論に思わず背筋が寒くなる。

ここで李華の論は、別の寓話に轉ずる。「一方、くびぎをあてられた牛は、まるで山が動くような大ききでございます。その生き様たるや、任務は重く目標も遠く、そして天下を利さねばなりません。死ねば筋も角

も皮も骨も、みな人の役に立つ道具になるのです。また水害や干害、そして暑さ寒さの不意の時でも、艱難な中、疲れを押しつけて、重なる岡を上り下りし、泥んこ道や水たまりの中を倒れたり起きあがったりです。しまいには蹄ははがれ關節もくだけ、力もなくなつて病氣になつてしまします。それでもまだ目は人をにらむような所がありますが、盗人鳥め、その背中に爪を立て、またその肉をくちばしでつき、それでもまだ存分に食えぬのを怨み、鳴き聲をたてて仲間を呼ぶではありませんか。犬の群れもその腹や胃を引き裂き、吼え合いながら争つていたのでございます。そのかたわらを車馬が何千何萬と行き来しているのに、顧みようともしません。どうしてこうなつてしまうのか。もつて生まれた才能は大きいのに災いにあう。彼を助けてやろうと思つても、うまくはいかないのでございます。」——この鋭い現實洞察力と描寫力。鳥が牛の背中を喰らう所は、杜甫の「瘦馬行」に似る。李華のこの弾劾調の物言いはじつに注目される。この發言の背後に、「高位は憤れること疾く、厚味は毒腊し」(同)という恐怖心と葛藤がどれだけ繰り返されたことか。よほど強い義憤があつたのかと想像される。李華のこの怒りが何に對して向けられたのか、これがとても重要である。

「(雛とちがつて)たといさほどの面倒を見なくとも、ただ牛を飼つているだけで、その利益はもとよりたつぷりとございます。ただ悲しいかな。才能の大きな者は災いを受け、才能の小さな者がかえつて貴くなる。理にもとり道にはずれること、これより甚だしいものはございますまい。天下に君たるお方よ、よくわきまえて本來の有り様に戻せば、すなわち不世出の仁者となりましょうぞ。」

雛と牛を、それぞれ才能の小大の事例として掲げ、今の世の人材登用の不合理をきびしく訴えたのである。李華はいう、牛のように大きな能力を持つていても、貴族の目に止まらなければ、ただ重い任務を擔わせ

られるだけで何の評価もされず、酷使されるのみである。おまけに病氣になつたら鳥につつかれ犬に食われて、無慘なことこの上ない。周囲の者も見て見ぬふり。だれも助けようとしないと。そして最後にいう、「悲しいかな。材の大なるや累を爲し、材の小なるや貴を爲す。理に戻りに悖ること、甚しきは莫し」と。李華の滿腔の憤懣が堰を切つてあふれ出てくる。今の唐王朝の政治は貴族體制の弊害によつて覆われている、との認識を寓話を借りて示したのである。

三 國家の興亡論

大唐の最盛期に、政治改革の旌麾を決然と掲げるとは、いったい何があつたのか。李華は當時の情勢について、たとえばこういう、「開元・天寶の間、海内は和平にして、君子學に於いて從容たるを得たり。是を以て詩人・材碩き者衆し。然れども將相屢しば其の人に非ず。流れを苟進(とかく出世や利祿を求めの意)に化して俗を成す。故に道を體する者寡し」(「楊騎曹集序」と。この「苟進」の親玉が、あの李林甫や楊國忠だつた。門弟獨孤及に「趙郡李公中集序」という李華の傳記の基本資料があるが、その中に「天寶」十一年、(李公)監察御史を拜す。權臣の政柄を竊かにし、貪猾にして路に當たるに會ふ。公入りては方書を司り、出でては二千石を按ず。斧を持ちて向かふ所、郡邑肅爲り。奸黨の嫉む所と爲る。御史府に容れられず、右補闕に除せらる」と記される。李華は監察御史の職務に精勵し、府にあつては四方の文書を管理し、外に出ては二千石級の幹部の出納を厳正に監査、皆を肅然とさせた。ために奸黨に憎まれ、天寶十四載、御史府から右補闕に回されるはめになる。この間、宰相だつたのが前出の二人だつたのである。

敢然として「當路」の「權臣」と對決した李華の政治主張とは、どん

なものだったのか。今ここに、國家の興亡を健康問題にたとえた寓話——「國之興亡」がある。

「國の興亡」(『全唐文新編』卷三百十八、一部『文苑英華』本により改む)

國を爲すは身を理むるに同じ。身、或いは不和なれば、則ち之に藥石し之に鍼灸す。若し夫れ扶病して攻めずんば、疾病して則ち斃る。之を扶ふる者は屍たり。齊隋の亡ぶや、終始に於て貞なるを以て惑と爲し、苟に無恥なるを明と爲し、事職に於て慢なるを高賢と爲し、義を見て爲さざるを長者と爲す。繩、用法を違ふれば、則ち附強にして潰弱たり。得失を議すれば、則ち寡を異とし衆に同ずるなり。學を尚び古きを希ふは之を誕と謂ひ、便に趣り時に中つるを之を工と謂ふ。其の燥濕を觀て之を輕重し、其の成敗を候つて之を褒貶す。肉食の尊は、滋味を以て其の口を餉す。危亡を忍んで祿利を饒ふ。自ずからは是れ下、則ち上司と曰ひ猶ほ之に如ふがごとし。我、國に於て何か有らん。設し能く憤發すれば、則ち逆きて備豫と爲す。動きは閔ざし關りは束る。氣は沮れ志は衰ふ。亦た從ひて化す。生に倖ふ者は炎炎として四合す。正に死する者は、援を求めても繼ぐ無し。麒麟は悲鳴し、鳳鳥は翅を垂る。鴟は鼓いて翼を害し、犬は呀いて喙を毒すれば、則ち虵鳩虎狼の熾んなるは、其れ向かふべきか。嗟乎、心腹支體は一なり。病を爲す者萬なり。岐緩有りて雖も請はず。岐緩、之を視るも救はず。噫、齊隋の亡びざること得んかな。是にして理なるに返れば、則ち王道は易易たり。

「國を治めるのは、わが身の健康管理をするのと同じことである。體の調子がよくなければ、藥石や鍼灸を行ったりする。もし無理して(病を)直さなければ、重くなつて倒れてしまう。無理をすれば屍となつて

しまう。」難しい話をできるだけ平易なたとえ話に置き換えて説こうとする。その上で、本論に移っていく。

「あの齊や隋が滅んだのも、終始、貞節であるのを迷走したものと、まことにもつて無恥なることを明察であるとし、職務において怠慢なのをきわめて賢明であるとし、義を見ても行動しない人を高貴なお方だと、あべこべなことを言ったからである。(曲直を正す)墨繩は使用法を誤れば、かえつて強引にもものになり(結果的に)ダメにしてしまう。(國の政治はこれと同様である。)得失を議論すれば、少數者を異端視し多數者に同調する。また學問を尊び傳統を重視すると、勝手な態度だという。そして便利さを求めて時流に乗る方を巧みだとたたえる。また(世論が)沸騰しているか冷靜かでもつて、その輕重を決めたり、成功するか失敗するかを待つてから、(結果論をふりかざして)あれこれ褒貶する。肉食する高貴な身分の者は、おいしいもので生活しているのだが、もし自分から困難な場面を忍んだ結果として、こうした祿利を得ることを願うようにすれば、下々の者はおのずから彼らを立派な高官と仰ぎ、それに従うであろう。」

本題に入るや、舌鋒は鋭くなる。李華の學問と見識がここに集約されている。政治の中樞にいる「肉食の尊」には、自ら「危亡を忍んで祿利を饒ふ」理想と氣概をもつて欲しい、そう李華は直言する。今の世はまるであべこべではないか。將來の唐王朝を擔う若手官僚の正義感あふれる告發として、彼の周邊——「蕭功曹(蕭穎士)、賈常侍(賈至)、獨孤常州(獨孤及)」(梁肅の前掲文)等から大きな贊同を得た様子が目に浮かぶ。

「私自身は、この國にとつて何ができるのか。もし頑張つて何かをすると、かえつて反抗して準備をしているという。ために動きは止められ、關わりをもつことも束縛されてしまう。かくして氣力はなえ、志も衰えていく。こうなると、流れに従つてなびくよりない。生きること親し

んでいる者の所には、光り輝くように周囲から集まってくるが、正義に命を捧げて死ぬ者は援助を求めても、だれもその意志を繼いでくれるものとしてない。(その結果)麒麟は悲しく鳴き、鳳凰は翼を垂れてしまう。また鴟(おきゅう)は羽ばたくことで、その翼を害し、犬は口を開くことで、その口を毒してしまふ。こんな有様では、蛇や鳩、虎や狼などの連中がのさばってしまうのは、理の赴くところとして當然である。」

世のため人のため盡力しようとするほど、反對に退けられていく。自分は本来の正義のために奮闘しているだけなのに、それを分かっではくれない。この不遇感はまさに後の韓愈・柳宗元らのものでもある。李華の無念の思ひは、自らを悲鳴する麒麟か、翼を垂れた鳳凰かと擬えずにはおかない。これは「王道に本づき、大抵、五經を以て泉源と爲し」(獨孤及)た李華の苦惱が、當今の世を世紀末と捉えさせていたことを物語る。この深い憂愁が杜甫の詩に凝縮的に發現したように、同時代人の古文としては、この李華のうちに典型化したといつてよい。

「ああ、心臓・内臓・四肢は一體のものである。これらの部分に病を持つ者は、萬をもつて數える。なのに醫師はいるのに、決して彼を要請しようとしなない。また醫師も病人を見ても救おうとしなない。」最後に、李華は冒頭の寓話に戻り、今の情勢を危機に瀕した病人と見る。そして、下された診断はこうである。「ああ、されば齊隋が亡びまいとしても、それは可能だったろうか。しかし、正義にしてかつ道理にかなった政治にもどれば、王道はたやすいものなのだ」と。李華は今の唐王朝は無理がたまつた重篤な患者だという。國家の病状を、いわば健康管理という視点から分析し、王道政治に復歸する治療が必要と提言するのである。この寓話は、韓愈の例の「雜說」二「善醫」の話に通ずるものがある。

おわりに

このような李華の改革姿勢を文章論という形で述べたのが、長編「質文論」である。學識と論理を盡くして説く重厚な議論はまさに壓卷である。紙數の關係で、今ごく一部しか取り上げることができないのが残念である。

「質文論」(『全唐文新編』卷三百十七)

天地の道は易簡たり。易とは則ち知り易く、簡とは則ち從ひ易し。先王は質文相變じ、以て天下を濟む。知り易く從ひ易きは、質より尚きは莫し。質弊るれば則ち之を佐けて以て文とす。文弊るれば則ち之を復して以て質とす。其の極まるを待たずして之を變ず。故に上暴する無く、下亂に從ふ無し。(中略)愚以爲らく、將に致理を求めんとするには、經史を學習するより始む。左氏・國語・爾雅・荀子等家は、五經を輔佐する者なり。(中略)誠偽、明めるに由無ければ、天下浸りて陂池と爲り、蕩して洪流と爲る。神禹の復た生まると雖も、誰か能く之を救はん。夫れ君人は、徳を修めて以て天下を治め、智に在らず、功に在らざれば、必ずや質して制有り、制して煩ならざるのみ。

李華は、自己の政治主張は決して難しいものではないという。いな簡單(易簡)なものでさえあるという。先王は質と文を交互に調整しながら、天下の政治にあつた。「分かりやすく行いやすいという點で、質よりも尊いものはない。もし質が行きすぎれば、これを補つて文るようにし、文が行きすぎれば、これを戻して質に返す。こうしてそれぞれが極端に走らないうちに修正した。されば上の者は暴走することがなく、下

の者も亂に走ることがなかったのである。」これが具體的には駢儷文によらない文體の提言と考えられる。そしてこの文體を支えるのが、達意載道の古文だった。續けていう、「愚考するに、深い道理を求めるとは、まず經學と史學を學習することより始め、左氏・國語・爾雅・荀子・孟子などの學問は、五經を輔佐するものとする。」と。まさに「中古の風」の復活宣言である。李華はこの復古思想のリーダー的存在だった。彼の周邊には同志が多く集まっていたから、その影響は甚大なものがあつた。その中に韓愈の長兄韓會もいたことは有名な事實である。李華の世直しを訴える口調はし

だいに熱を帯びていく。「もし誠と偽物とを明確にすることができなければ、天下は亂れてため池となつてしまふし、また動搖して洪水となつてしまふ。そうなれば、たとい禹が再び生まれようと、誰が一體救うことができようか。」

しかし、彼の憂慮は現實のものとなつてしまふ。ついに安史の亂が勃發してしまふのである。その後、李華がどんな苦難をたどつていったのかについては、また稿を改めて論ずることとしたい。

(愛媛大學教育學部教授)